

ID No.	1015
研究課題名	成人 T 細胞白血病リンパ腫(ATL)に対する化学療法・同種造血幹細胞移植の治療効果に関する新規評価法の開発
研究代表者	福田 隆浩 (国立がん研究センター中央病院・科長)
研究組織 受入教員 研究分担者	東條 有伸 (東京大学医科学研究所・教授) 伊藤 歩 (国立がん研究センター中央病院・医員) 田中 喬 (国立がん研究センター中央病院・医員) 井上 明威 (熊本大学医学部附属病院・医員) 内丸 薫 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授)
研究報告書	
ATL患者における同種造血幹細胞移植において、移植後に再発をきたした場合の予後は極めて不良であり、大きな問題となっている。本研究では、70歳未満の急性型・リンパ腫型のATLに対する初回同種移植症例を対象として、移植前および移植後の検体を用いて東京大学医科学研究所IMSUT臨床フローサイトメトリーラボで12色のMulticolor FACS解析を行った。微少残存病変評価法は東大医科研で開発されたCADM1強陽性CD7陰性細胞(Kobayashi S, Uchimaru K, et al. Clin Cancer Res 2015)を検出するHAS (HTLV-1 analysis system)・Flow法を用いた。またHLA不一致移植症例においては、東大医科研からの既報(Matsuno N, Watanabe N, et al. Br J Haematol. 2013)の通り、ドナーまたはレシピエント(患者)に特異的なHLA分子を認識する蛍光標識抗体を用いたフローサイトメトリーによるキメリズム解析を行った。 平成31年1月の合同班会議で、CADM1強陽性CD7陰性(N分画)の判定困難例についての基礎検討結果を報告した(伊藤・勝俣・渡辺)。移植前後でHLAフローキメリズム解析が可能であった17症例において、N分画に集塊状の細胞集団を認めた5症例は全てレシピエント細胞(ATL再発)であった。一方、N分画にCADM1弱陽性からスメア状の細胞集団を認めた12症例では、11例がドナー細胞(非ATL)、1例がレシピエント細胞(生着不全)であった。43例の予備的解析の結果、移植後4週時点のMRD陽性例では累積血液学的再発割合が高い傾向を認めた。今後、本HAS-MRDとプロウイルスDNAや詳細な再発情報も含めた解析を行い、論文報告する予定である。	